

## 短所

2024. 1. 14

よく長所とか短所とかいう。あまり好きではない。一般的に日本人は、短所をいうのは得意だが、長所になるとそうでもない。面接試験では、仕方なく自分の長所について述べるが、普段からその長所を意識しているかというところはどうだろう。短所には、直さなくてはいけないものというイメージがつきまとう。ところが、なかなか直るものではない。そうすると、自分はだめな人間だとなる。その結果、自己肯定感は低くなる。

イタリア人に短所を直そうという発想はあまりない。人から見れば直すべき欠点と思えるようなことでも、それはその人の個性ととらえてあげる。「彼はいつも時間に遅れるけれど、そういう人なのよ」とか「妻は見栄っ張りや浪費家だけど、仕方ないから」などと非常に寛容である。もちろん一度か二度は注意するのだけれど、それで直らなければ、「そういう人だから」で落ち着く。

なぜそうなるのか。短所を上回る長所を見つけて評価するのがうまいからである。「いつも時間に遅れるけれど、必ず素敵なレストランに連れていってくれるから」といった具合である。当然、食べ物の好き嫌いも直すべき欠点ではなく、その人の個性と考えられている。

どうも日本では、寛容の度合いが違う。あまり許してもらえない。その結果、何だかとても窮屈である。長い期間に渡って、その国が培ってきたものが、そう簡単に変わるわけがない。欧米とは違う土台のところに、個性をもってこようとするため、ややこしくなる。

人間は、好きなことだけをやらせておけば、その才能は伸びるだろう。一方、バランスのとれた総合的プレイヤーのような人材を養成しようとする、欠点を矯正する必要がある、均一な規格的人材を養成してしまう恐れがある。

個性を伸ばす教育ということが話題に上るが、それはある意味、欠点を許容する教育であるのかもしれない。イタリアがたまに輩出するとても天才を見るにつけ、やはり欠点と個性は紙一重なのだとの思いを強くする。

今の中学校は、昔に比べると、だいぶ寛容になった。個性は尊重するが、短所や欠点は直すものであり、そうしないと社会に出てから困るだろうという考えのもと、本人のために指導してあげる。そもそも人間関係で苦労することになる。なぜなら、寛容の問題である。許してもらえないからである。

中学校は、バランスがむずかしい。きちっとさせたいのだが、そうすることが果たしていいのだろうか。型にはめてしまうと、せっかくの才能が伸びなくなってしまうかもしれない。何もしない方が、かえって本人のためになるかもしれない。中学校もそうだが、日本人は過渡期にいるのかもしれない。

まずは、短所、短所とあまり言わないことである。それよりも、長所を意識させたい。「あなたのいいところは、こういうところですよ」本人が気づいていないような点を教えてあげられれば、それは立派な教育である。